

【注意】発行当時の原稿をそのまま掲載しております。農薬について記載のある場合は、最新の農薬登録内容を確認し、それに基づいて農薬を使用して下さい。また、成果情報によっては、その後変更・廃止されたものがありますのでご注意下さい。

[成果情報名] 暑熱期における豚精液性状へのホルモン剤投与効果

[要 約] 暑熱期に種雄豚に対しホルモン剤を投与することにより精液量及び総精子数が増加する。

[部 署] 山形県農業総合研究センター養豚研究所

[連絡先] TEL 0234-91-1255

[成果区分] 普

[キーワード] 暑熱ストレス、豚精液性状、テストステロン

[背景・ねらい]

近年の夏季における暑熱ストレスは種雄豚の精液性状を悪化させており、交配手法（自然交配、人工授精）に関わらず、繁殖成績に大きな影響を及ぼしている。県内養豚場の繁殖成績の安定・向上を図るため、暑熱期の種雄豚に対しホルモン剤（テストステロン）を投与することにより精液性状にどのような効果があるのか検討する。

[成果の内容・特徴]

暑熱期（6月から9月）に種雄豚に対してホルモン剤を毎月1回投与することにより、投与しない場合と比較し、精液量及び総精子数が増加する（図3、4）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 試験を実施した令和元年は、気温が7月から10月にかけて平年より高く推移した（図1）。特に8月は豚舎内最高気温が30℃を上回る日が多く見られた。また、最低湿度は暑熱期において60%前後で推移した（図2）。
- 2 ホルモン剤は暑熱期に毎月1回、1頭当たり2.5ml（テストステロンエナンチオマーとして250mg）を皮下注射により投与。当該薬剤は獣医師の指導のもと、安全に注意して使用すること。
- 3 ホルモン剤投与のコストは1頭当たり6,000円/年（4回分、薬剤費のみ、税別）。

[具体的なデータ]

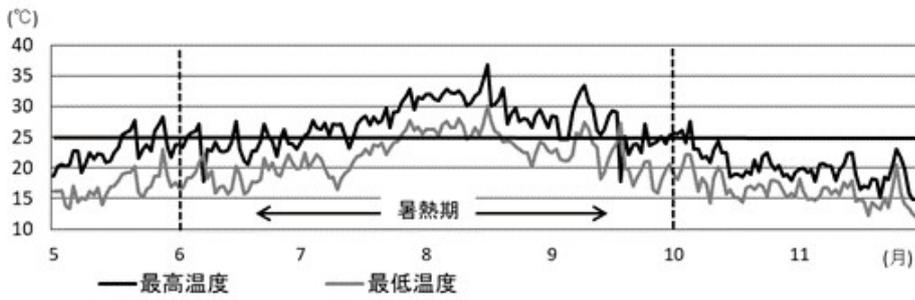


図1 豚舎内温度の推移 (令和元年)

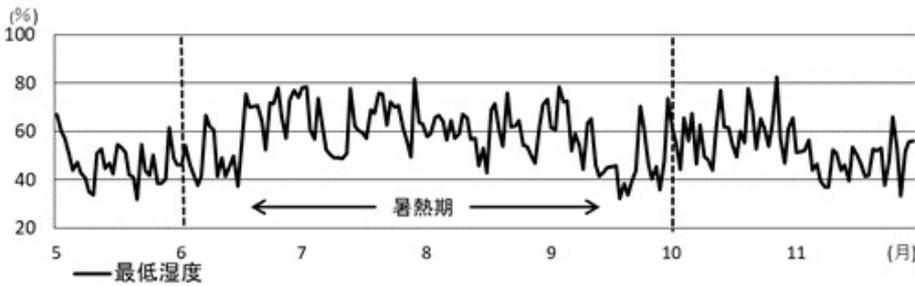


図2 豚舎内湿度の推移 (令和元年)

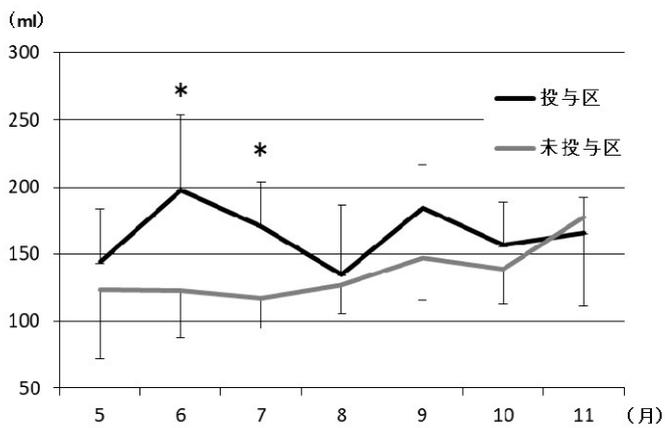


図3 精液量の推移 (令和元年)

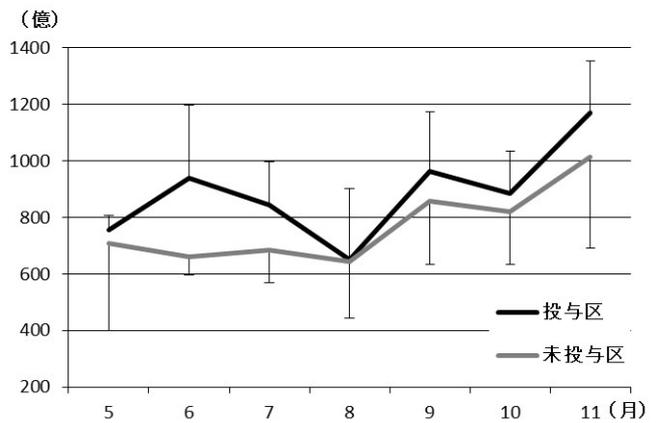


図4 総精子数の推移 (令和元年)

[その他]

研究課題名：暑熱期の豚精液性状に及ぼすホルモン剤及び抗酸化物質の投与効果

予算区分：県単

研究期間：令和2年度（令和元年度～令和2年度）

研究担当者：藤田琴菜、星川穂奈美

発表論文等：なし